

2026年3月1日 第二礼拝

説教題『聖霊に「縛られて」』使徒言行録20章17～32節

主任牧師 加藤 誠

「今、神とその恵みの言葉にあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なるものとされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです」(使徒言行録20章32節)

「人の思い」か「神の御心」か。両者はしばしば真っ向から衝突します。そして私たちはその狭間で葛藤し、悩み、ため息をつき、天を仰ぎます。

今朝の場面で、エフェソ教会の人々は「パウロのエルサレム行き」に泣きながら反対しました。異邦人伝道に全力を尽くしてきたパウロ。「もう律法を守る必要はない。イエス・キリストの救いを受け入れるだけで十分」とキリストの恵みを語るパウロに対して、いまだに激しい憎悪を向けるユダヤ人がエルサレムには大勢いることを、人々は知っていたからです。アジア州の伝道でも、パウロが行くところに必ずユダヤ人たちの執拗な妨害があり、エフェソでも大きな暴動が起こったことを人々は目の当たりにしていました。そのパウロがユダヤ教の総本山であるエルサレムに行くのは非常に危険だ。大変なことになる。「パウロ先生、止めてください。エルサレムなど行かずにアジア州でまだまだ伝道してください」。人々はそう考え、切望したのです。

それに対して、パウロは「わたしは、霊に促されて(=縛られて)、エルサレムに行く」(使徒 20・22)と語ります。聖霊に「縛られて」とは「自分の思いとは違う方向に」ということでしょう。パウロ自身もまだアジア州で伝道したかったし、彼が目指していたのは「さらに西のローマ」であり、「さらにその先のイスパニア(スペイン)」にまで行ってキリストを伝えることでした(ローマ 15:24 参照)。復活の主イエスが「地の果てまで、あなたがたはわたしの証人となる」と言われたとおり「西の地の果て」を目指していたパウロにとって、「東」のエルサレムは方向的には「正反対」であり、そこに向かうのは「逆行」です。しかし、パウロは「自分の願い」による一歩ではなく、「聖霊に縛られた」一歩を踏み出していくのです。

パウロを突き動かしていたのは、主イエスから託された「任務」の自覚でした。「神の恵みの福音を力強く証しする」。この「任務」に心の焦点を合わせた時、パウロは聖霊に「縛られて」、エルサレム行きという決断に導かれたというのです。ただ、「福音を力強く証しする」という「任務」とエルサレム行きとが具体的にどう関係するのでしょうか。「福音を証しするため」にこのままアジア州にとどまる選択もありえる。と、「福音を証しするため」にさらにローマやイスパニアに向かう選択もあるはず。なぜ「福音を証しするため」にエルサレムに行かなければならないのでしょうか。

使徒言行録にはその理由が何も書かれていませんが、この頃にパウロ自身が書いた「ローマの信徒への手紙」15章に彼のエルサレム行きの理由が書かれています。それ

によるとパウロは「コリント教会などマケドニア州やアカイア州の教会の人たちが、エルサレム教会のために集めた献金を届けに、ローマに行く前に、まずはエルサレムに行かなければならない」と語っています。エルサレム教会はユダヤ人中心の教会で、コリント教会などは異邦人中心の教会で、両者の間には、使徒言行録 15 章で紹介したように「割礼をどう考えるか」を巡って、激しい意見の衝突がありました。エルサレム会議では「異邦人には割礼は強要しない」という結論になりましたが、エルサレムはユダヤ教徒の町です。「ほんとうにそれでいいのか？」という意見が根強くくすぶっていました。「異邦人教会とエルサレム教会が、このまま疎遠になってしまうのはよくない。二つの教会が祈りを一つにして、共に主の証しを立てていく必要がある。そのために異邦人教会の祈りと献金を直接エルサレム教会に届けよう。それが主の福音を力強く証しすることになる！」と、パウロは考えたのです。エフェソの信徒への手紙でパウロは「実にキリストはわたしたちの平和であります。…キリストは十字架において敵意という隔ての壁を取り壊し、二つのものを一つにし、御自身において一人の新しい人を造り上げて平和を実現されました！」と語っています。この「キリストの平和」＝「恵みの福音」を力強く証しするための「エルサレム行き」だったので、そこでは迫害と投獄の危険が待ち構えており、自分としても西のローマやイスパニアに行きたいけれど、主から託された「福音を力強く証しする任務」に心の焦点を当てた時、パウロは「聖霊に縛られて」、エルサレム行きを決断したのでした。

「人の思い」か「神の御心か」という最初の問いに戻るなら、マルコ福音書でも主イエスがエルサレムに向かって先頭に立って歩まれるのを見て、「弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた」（マルコ 8・32）とあります。また主イエスご自身もいよいよ十字架が目の前に迫る中で「ひどく恐れてもだえ始め」（同 14・33）ています。

神の御心を前にしたとき、私たちは恐れるのです。「恐れを感じず、悩みもしない」としたら、それは神の御心ではないかもしれない。神に従おうとするとき、私たち人間は恐れるのです。私たち自身の力では一歩が踏み出せない。それゆえ聖霊の助けと神の恵みの言葉を求めたいのです。

エルサレムに向かうパウロを見送るエフェソ教会の人たちが一緒に浜辺でひざまずいて祈る姿に心打たれますが、大切なのは 32 節のパウロの告別の言葉でしょう。「そして今、神とその恵みの言葉にあなたがたを委ねます…」。「人の思い」と「神の御心」との狭間で、私たちは揺れる。迷う。不安や心配があふれてくる。そのような中で「主から託された任務」に心の焦点を合わせながら、繰り返しキリストの恵みの言葉に立ち返っていく時、私たちはキリストの教会、神の恵みを受け継ぐ者として建て上げられていく。その確かな約束がここに語られています。「人の思い」を砕かれながら「神の御心」に建て上げられていくことを祈っていきましょう。